

宗祖弘法大師青葉祭祭文

うやうや おもんみ

恭しく惟るに、東方山の靈峰は琵琶湖南の天高く

しょうりつ

はんも

しゅうよう

さんろく

聳立し、千古の青葉を繁茂し、秀容を示す。山麓の安養

とこしな

ひみっしょうごん

寺境内一円に咲き誇るシヤクナゲの花の色 鎮えに秘密莊嚴

その

の園を開く。

にんのう

こうにん

真言宗宗祖弘法大師は人皇第四十九代光仁天皇宝亀五

あと た

年六月十五日、讃岐国多度郡屏風ヶ浦に迹を垂れ給う。幼

はや

きんせん

あお

にして總明叡知夙く金仙の風を迎ぎ、生年、五十六歳にし

むびつね

しおうい

て夢寐毎に諸仏の蓮台に同座して大法を談義し四王為に

かさ

ごえい

ぐどう

たいし

そよう

ふんぼう

きざ

蓋を執りて衛護せりと。求道の大志既に双葉に芬芳を兆

ああ

むべ

かな

すなわ

ひちじく

けいせん

やまと

せり。嗚呼また宜なる哉。遂に乃ち七軸の契線を大和・

くめ

どうげ

ま

ふにいっしん

みようり

かんとく

久米の塔下に繙きて不二一心の妙理を感得し、三千七百

かいり

しの

せいりゆう

だんじょう

の海路を凌いで唐に渡り、五部の秘蔵を青竜の壇上に

う

しんごんみつきょう

にちいき

ぐつう

稟け、真言密教の秘法を日域に弘通す。

あるい

こくじ

せいてい

そうせい

或は国字を制定して蒼生を啓蒙し、或は工芸美術を興

うるお

ほびい

して日本文化を潤し治水土木を施し道なきところに道を

水なきところに水をひく。或いは産業の発展を図り、以てはってん はか もつ
百生の利養を豊ひやくせいにりやうすることゆたか枚挙いごまに遑まあらず。

かの如く大師の慈光は十方三世まつとに末徒の群性を利益し随ぐんしやう
機きの教旨きやうしは宏大無辺なり。時あたかも大師の数多の偉業の
うち、靈峰高野山を開創され今年は千二百年を迎える。大
師は御歳四十三歳、平安朝嵯峨天皇の御世、光仁七年六月
十九日、朝廷に「高野山を賜わらんこと」を請う。すると
早々にも七月八日に勅許を受く。

以来、高野山は「天下の修禪の道場、生身の仏しゅうぜん、弘法大
師の聖地」と宗旨、男女、遠近おんごんを問わず全国津々浦々より高
野詣でがとぎれずに跡を断たない。

五十年、半世紀を記念して高野山全山で開創千二百年の
大法会がさる四月二日より開幕。五月二十一日まで法会絵
巻が繰り広げられるなか、当山安養寺では、四月十九、二
十日の両日、熊谷俊亮任職の発願により開創法会参拝団が
結成される。二十日、本山泉涌寺上村貞郎長老猊下が、
高野山壇上伽藍の金堂において導師となり泉涌寺派僧侶出
仕のもと法要を厳修。安養寺参拝団も共に参列し歡喜の法
悦を合掌で結ぶ。とくに安養寺巡拝団は熊谷任職の心根の
信心をたずさえ前日は弘法大師が高野山開創に当たり守護
の神となる立里たてりの荒神こうじんへ秘境をものとせず、また天空の高山

に社をかまえる荒神社本殿を参詣。 こうじんじや ここでは大師流慈苑講 じえんこう

山下登美宗大梵詠らによる男女講員の朗々たる奉詠が行われ とみそうだいぼんえい

た。

そして金堂での法要の前には大師入定の奥之院・祖廟で にゆうじょう そびょう

も慈苑講のご詠歌奉詠で信火は大師讚仰に燃え上る。 じえん しんか さんごう

本日茲観音堂に稚児大師の尊像を荘厳し大師の降誕を慶 こと ちご

讚、その本懐と生命の尊嚴を億念。併せて四年前、不帰の ほんかい おくねん

客となられた直子寺族夫人法号寂光院覚苑慈祥大姉位を思 たんせい

んで青葉の祭典を厳修し報恩謝徳の丹誠を捧げまつらんとす。 さんね あかつき まつせ

乞い願くば宗祖大師御誓願を三念の暁に期し、末世衆 ことごと じし えこう あず

生悉く慈氏の恵光に預からんことを。重ねて乞う。

即身成仏 そくしんじょうぶつ 密嚴国土 みつごんこくど 世界平和 せかいへいわ

万人豊楽 ばんにんぶらく 乃至法界 ないしほうかい 平等利益 びょうどうりやく

平成二十七年五月十七日

京都府向日市寺戸町

亀光庵住職 土口哲光敬白